

生涯学習者としての看護師からみた図書館への期待

井部 俊子

(長野保健医療大学/株式会社井部看護管理研究所)

IBE Toshiko (Dean, Faculty of Nursing, Nagano University of Health and Medicine), Expectations of Libraries from the Perspective of Nurses as Lifelong Learners. *Nursing and Information* 2022;29:18-25.

I. はじめに

私の講演に先立って行われた統括理事のお話は、日本看護図書館協会が、いかに重要であるかという認識を私に強く印象づけることになりました。私は、母校である前職の大学において、また私が長く勤務した病院においても、図書館にはよく通い、非常になじみ深い場所でした。現職の大学では、新設学部ということもあり、その機能の差を痛切に感じています。ぜひ、日本看護図書館協会には、全国の看護図書館の質を維持するために活躍していただきたいと思います。改めまして、創立30周年を迎えられた日本看護図書館協会を祝し、この記念式典で講演をする機会を得たことを光栄に思います。

II. 「看護という仕事」から得たこと

これから、私の経験から考えた、看護師・看護学生が学ぶ図書館のあり方について述べていきたいと考えています。最初に、私のキャリアについてまとめた記事¹⁾をもとに、ここに立っている私についてお話ししたいと思います。

1. 臨床での経験

私は、母校(聖路加看護大学、当時)を卒業した後、あまり就職活動もせずに手近にある病院に就職しました。配属されたのは外科病棟で、看護師として楽しく弾むように仕事をしていたと、今、思い返しています。看護師としての「修業」だけではなく、当時のおもしろい同僚たちの中で、その後の人生の基盤になる多くの知恵を教わりました。自分より年上の人生の達人であった医師たちは教養豊かで寛容でした。ある医師Mは大変な競馬のファンで、私に競走馬の美しさから馬券の買い方まで幅広く教授してくれました。また、若い人たちは全く分からないと思いますけれども、日劇ミュージックホールへ病棟の有志が団体で行き、華麗なダンサーをめでの

こともありました。今は消滅して有楽町マリオンになっているところですが。3月のある朝には、M医師がゆったりと病棟に現れて「今日はケイチツの日ですよ」といきました。私は最初「経膈」を思い浮かべてしまったのですが、後に「啓蟄」、冬ごもりの虫がはい出る季節を指す言葉であると知りました。このような断片的な記憶がとても懐かしく思い出されます。

18年間の臨床看護師としての勤務は、^{ひら}平の看護師から主任、師長と一当時は婦長といいましたけれども一管理を担うことへ急速に変化していきました。そのなかで知識の枯渇を感じた私は、途中2年間休職して、母校の大学院看護学研究科修士課程に進学しました。アルバイトで婦長をすることは、今はあまりないと思いますけれど、週末は夜勤婦長をして収入を得て、社会保険料を支払いました。

修士課程を終えて職場に戻ると内科病棟婦長を命じられました。内科病棟は新たな経験でしたが、外科系看護師と内科系看護師では気質がかなり違うことがよくわかりました。一人の患者と関わる時間の流れ方や、回復の見通しの立ちやすさの違いからかもしれません。どちらかという、外科系はマニュアルがきちんとしていて明く楽しくできる雰囲気であり、内科系のほうが内向的であるようです。そもそも看護の原点は内科にあるといわれたこともあります。私は外科病棟に新人から入りましたが、この内科系看護師の気質は、経験するうちに、本来の看護の原点かもしれないと思いました。図書館司書として、利用者が何を専門としているのかによって気質の違いがあることに気づかれるかもしれません。その人の背景を見極めてほしいと思います。

2. 看護教育の原点

修士課程で学んだ私は、今までよりも現実がよく見えるようになり、自由闊達な^{かつ}病棟づくりに励みました。しかし、中間管理者の職権に限界を感じて退職を決意し、大学教育の場に身を移すことになりました。開学して2

年目であった、都内の看護大学の講師となりました。新設大学で教員は4年間変わらないことが条件ですが、このときは教員が一人、退職したために、その後任で、私は初めて大学教育を経験することになりました。臨床から教育へとスイッチを切り替えたわけですが、当時の看護学部は談論風発の職場でありまして、私に教育者としてのあり方を教えてくれたと思っています。特に印象深いのは中西睦子先生です。中西先生は最後の著書、まるで自分の遺書のような『異端の看護教育』²⁾を遺されていますが、そこから彼女の異端ぶり、それを受け継いだわれわれ何人かの教員（「軍団」といわれていました）の特徴がわかります。病院で実習指導もしました。大それたことはいえませんが、この経験は私の実習指導の基盤を形成するのに十分な機会をもたらしたと思っています。

初めての教員生活は3年間でした。看護管理という分野に未練のあった私は、母校の大学院看護学研究科博士課程に行くことを選択しました。2度目の大学院では休職ではなく専ら学生として過ごしました。その間、アルバイトでお世話になった老人病院がありました。そこでは認知症の高齢者と対峙し、認知症の世界を体験してケアの在り方を模索したという時期でした。その後「専ら大学院生」という期間は3年間で切り上げ、看護師としてキャリアを始めた病院に再就職したのが45歳のときでした。看護部長・副院長として臨床現場に戻りました。このとき、クリントン米国大統領の就任時期と重なり、彼の任期に合わせて、自分の任期も8年としようとのなかで決めていたもの、「職位の魅力に引きずられ」¹⁾、結局10年、この仕事をしました。

3. 看護部長時代の改革

看護部という組織のトップである看護部長という職位を得ますと、中間管理者ではできなかったことが、やろうと思えばできることがわかりました。ですから、皆さんもいろいろな職位でいらっしゃると思いますが、今できないことも次の職位になるとできる可能性があることを覚えておいてください。看護部長として、まず行ったことは、看護部の組織を逆ピラミッド型にして、ラインアンドスタッフという組織の確立、つまり現場の看護管理者に権限を委譲するということです。さらにスタッフ機能としてリソースナースと名づけた看護師を位置付けました³⁾。皮膚・排泄ケア認定看護師、精神看護専門看護師、感染管理認定看護師、がん看護専門看護師、呼吸ケアナース、PDナースと呼んでいた腹膜透析

看護師、治験コーディネーター（CRC）などがありました。さらに糖尿病療養指導士、集中ケア認定看護師、そして、当時はディスチャージ・プランナーと呼んでいましたが、現在は一般的に退院支援、あるいは退院調整看護師といえます。専門看護師や認定看護師など、そのような制度がなかったときに、こうした専門性をもつ看護師が必要だと考え、それぞれが活躍できるポジションを考えました。さらに「ケア検討会」という組織を作り、こうした看護師にそのリーダーとなってもらいました。また「キャリア開発ラダー」を用いた同僚評価と人材育成を積極的に行いました。看護部長などの看護管理者は任命ではなく、自薦、他薦で幅広く選ぶという方式をとりました。

看護部長時代には、同時に日本看護協会という巨大な職能組織の副会長、そして監事を通算16年務めました。このときは国の審議会や検討会に出席して、日本看護協会の代表として意見を述べるという機会をいただきました。これは私にとって挑戦の連続でした。このような場で自己効力感を培い、度胸をつけ、多くの知己を得ました。そして、課題であった博士論文を仕上げ博士課程を修了しました。

4. 学長、そして現在

看護管理者の仕事に終止符を打ち、次に選択したのは、再び大学教育の場でした。厳密にいうと、教授、学長という大学マネジメントです。ですから、私の人生の多くはマネジメントをすることにつながっていることがわかります。この間に大学院生の研究論文指導にもかかわりましたが、これもまた濃密な時間でした。大学院生の指導は大抵が一对一の機会ですので、相手の知的水準だけではなく、生き方が丸ごと分かるような、そうした濃密さでした。大学院生も教える側も、まさに体当たりだと思いました。

大学マネジメントと並行していたのが、看護系学会等社会保険連合⁴⁾での働きです。略称、「看保連」の初代代表は私でした。看保連は、診療報酬や介護報酬の改定に際し、看護系学会から提案をするという機能を持っています。まさにエビデンスに基づいて政策を動かす組織です。また、私立看護系大学協会⁵⁾の会長も務めました。

定年後は大学を退き個人のオフィスをつくりました。特に若い看護管理者に向けてコンサルテーション活動をしようと考えたからです。ところが、長野県にある新設大学の副学長・看護学部長として、再び、大学教育とマネジメントを引き受けることとなり現在に至っています。

す。これまでが私のキャリアです。

5. キャリアを振り返って得たこと

この半世紀にも及ぶ私のキャリアで今、何が出来るのかを考えると、そこから抽出したエクス、私が医療人としての仕事から得たことは、まとめると以下の5点となります。さほど目新しいことではないかもしれませんが。皆さんにも共通するものではないかと思えます。

(1) 好奇心を刺激し飽きることがない

特に医療人としての仕事は常にそうであったといえます。

(2) その気になれば無職になることがない

皆さん司書の人たちは、職がなくなることがあるのでしょうか。今、職のない人たちが非常に苦勞されていますけれども、その気になればずっと仕事を続けることができ、無限にキャリア開発もできます。国が定める看護職の免許は、保健師、助産師、看護師、准看護師と4種類だけですけれども、多様な資格があります。最も活躍している資格は日本看護協会が認定をしている専門看護師と認定看護師、そして認定看護管理者ですが、ほかにも資格は多様にあります。

(3) 自分の人生哲学という最大の報酬が得られる

このように生きていけばよいという自分なりの人生航路を考えることができるのは大きな報酬であると思います。

(4) 知行合一である

知識と行動とは一体のもので、どちらが先立つとは言えないという王陽明の言葉だといわれています。看護学は実践の科学ですので知行合一であるといえますが、この知行合一について少し説明します。

西部邁は、妻ががんになり、その妻の死への接近において、次のように書いています⁶⁾。

彼女の身体の深部を^{さいな}苛んでいるに違いない苦痛を^{やわら}緩げてやるには、また彼女の心理の根底に^{うが}穴を穿ちはじめていること必定の不安を軽くしてやるには、実際どうすればよいのか、途方に暮れることが多いのです。(中略)妻の面倒も看られないというのでは、僕が行ってきた言論は無意味もいいところだ、と言わねばなりませんまい。

ここで西部は中江藤樹の「学問とは母親の面倒を看ることだ」を引用しています。私はこの一節に出合ったときに戦慄が走ったことを覚えています。自分はどうだっ

たのかと問い、看護という学問を学んできて、母親の面倒をしっかりと見たのかということ突きつけられたような気がしました。その後、西部は入水して自殺を図りましたが、そういう前段がこの本の中には綿々と書かれていました。

(5) グレーゾーンを歩む

看護の世界には正解というものがなく、常にグレーゾーンを歩むことが多いわけです。割り切れない事柄がたくさんありますが、このグレーゾーンを歩むことができる能力も培っていかねばならないと思います。私が看護部長の時に、スタッフで「このようにイエスかノーか分からないようなグレーの中で、私はやっていけない」と言って辞めた看護師がいました。「ではどうするの? 何をするの?」と尋ねたところ、「スチュワードスになる」という答えが返ってきました。そのとき、私は、スチュワードスもグレーゾーンがあることが多い、どの仕事にもグレーゾーンがあるのではないかと思いつきながら送り出した経験があります。だからこそ、おもしろい、豊かな世界なのではないかと思えます。

Ⅲ. 本の旅: 読書の効用

図書館とのかかわりをお話します前に、私と「本」との関係、生活の中の「読書」についてふれたいと思います。昨今の閉塞的な世の中で経験した「バーチャル・ユーラシア紀行」⁷⁾です。

1. 「旅」のはじまり

私は、勤務先の長野に新幹線通勤をしていますが、車内誌『トランヴェール』をよく読みます。この巻頭に「旅のつばくろ」というエッセイが掲載されます。沢木耕太郎が毎号、見開き2ページで日本国内の旅を綴り、これに彼が撮影した写真が1枚添えられています。

図書館でも沢木の著書が多く所蔵していると思います。新刊では2020年3~6月の間、『セッションズ〈訊いて、聴く〉』という対談集をシリーズで出しており、私は毎回この刊行を心待ちにしていました。その書き出しの部分を気に入っているので少し引用します⁸⁾。

私の幼い頃の最も甘美な記憶のひとつに、日曜日の夕方、縁側で弱い西日を浴びながら父親の朗読する声を聞いているという情景がある。父親は、新聞に連載されていた子どものための冒険活劇の読み物を切り抜き、毎週日曜になるとそれらをまとめて読んで聞かせ

てくれていたのだ。私は耳を澄ますようにして聴きながら、次の展開を早く知りたくて、“それで、それで”と心のうちでつぶやいているような気がする

この光景は、『セッションズ』の次の刊行を待ちわびる、読者である私との関係に似ていると思いました。シリーズは全4巻で、それぞれ「Ⅰ. あう：達人、かく語りき」「Ⅱ. きく：青春の言葉たち」「Ⅲ. みる：陶酔と覚醒」「Ⅳ. かく：星をつなぐために」というタイトルがつけられています。いずれも沢木がこれまで長い間インタビューをして書きためてきたさまざまな記事がここにまとめられて掲載されています。なかには吉永小百合や高峰秀子も登場し、彼は本当にいろいろな人に出会っているのだとわかります。

このなかで、非常に心に残ったところが『セッションズ』第Ⅲ巻収録の「海があって、人がいて」というインタビューです。海洋冒険家である白石康次郎が、師と仰ぐ多田雄幸について語っています⁹⁾。多田は、単独世界一周ヨットレースで優勝したこともある冒険家ですが、その後、破綻し、自殺をしてしまいます。両者を知る沢木との対話から、彼の短い人生が白石や周囲の人々に遺した影響の大きさを感じました。短い一節でしたが、彼の生き様は私の記憶にくさびを入れました。

2. バーチャル・ユーラシア紀行

さて、沢木は『セッションズ』のなかで、代表作であるノンフィクション『深夜特急』のことを頻りに語ります。1986年に刊行、JTB紀行文学賞を受賞している作品です。そこで私は、『深夜特急』が読みたくなりました。現在、文字拡大増補新版全6巻が刊行されており、老眼の私にも読みやすくなっています。これを入手して貪るように読みました。その1巻はこのように始まります¹⁰⁾。

ある朝、目を覚ました時、これはもうぐずぐずしてはいられない、とってしまったのだ。私はインドのデリーにいて、これから南下してゴアにいかうか、北上してカシミールに向かおうか迷っていた。

日本を出てから半年になろうとしていた「私」は、1,500ドルのトラベラーズチェックと400ドルの現金をつくり、仕事の全てを投げ捨て旅人になります。恐らく沢木はこの時26歳ほどだったと思いますが、サラリーマンをさっと辞めて旅に出ます。「私」の旅では予定を立て

ず、移動は乗り合いバスを使い安宿に泊まることを掟にしているのが、現地に着くと必ず宿の価格交渉から始まります。このように1年以上にわたるユーラシアを放浪してゴールのロンドンに到着します。最後に沢木が東京に「WARE-TOUCHAKU-SEZU〈ワレ到着セズ〉」と電報を打つ場面が描かれ¹¹⁾、彼の放浪の旅はまだ続くという余韻を残して終わります。

こうした本の旅はどきどき、わくわくします。今回、第1巻を2020年6月30日に読み始め、6巻の読了は2020年8月31日、夜9時10分でした。この2カ月間、香辛料のにおい、カジノでの酔狂、舗装のされていない路面から舞い上がる土埃、真っすぐに差し込む朝日などのとりこになっていました。『深夜特急』の旅人である「私」と一緒に旅をしていたのです。新幹線通勤の途上でのことだったので。

印象に残ったのはこの次の場面です。イランで3番目に大きい都市、メッシュドというところで、旅人の「私」が経験した話です¹²⁾。貧乏旅行中で、食堂で客の誰かから食べ残しを分けてもらっていた若者が、まとわり付いてきた現地の2人の男の子に何のためらいもなく自分の全財産を分け与える光景を見て強い衝撃を受けるわけです。「私」は物乞いのたった1人にすら金を恵んでやるのがなかったし、恵むまいと心に決めていました。1人の物乞いにわずかな小銭を与えたからといって何になるだろう、その国の絶望的な状況が根本から変革されない限り個々の悲惨さは解決不能なのだ、しかも、人間が人間に何かを恵むという傲慢な行為は到底許されるはずのないものだと思っていたのです。しかし沢木は、若者のその行為を目の当たりにした後では、それは単にあげないための理由づけに過ぎず、自分が吝嗇^{りんしやく}であると、けちであるということを認めたくないための屁理屈だ、ただけちなのだという考え方に及び、「私」は呪縛から解き放たれて一気に自由になるという場面が描かれていました。これには私もどきどきしました。その結果、私は、最近さまざまな寄付の依頼に応えるようになるという行動変容をみえています。

コロナ禍の閉塞感のなかで、この「私」の旅との伴走は私に「脱獄」という格別の時間をもたらしました。刑務所から脱獄することを隠語で「ミッドナイト・エクスプレス」というそうです。まさにこの2ヶ月は脱獄の期間であったと思います。

IV. 看護師・看護学生の学習環境として図書館に求められること

これまでに経験した図書館サービスの事例から、私が考える、看護師・看護学生の学習環境としての図書館に求められる要件についてお話したいと思います。

1. 私が経験した図書館サービス

(1) 思考の伴走者

私が、母校に看護管理学の教授として戻ってきた時期の話です¹³⁾。ある日、大学の自室の机に文献のコピーが置かれていました。そこには図書館司書のメモがありました。

エンパワーメントという視点でチームを捉えた後の井部先生が、現在興味を持っているのは、そのチームを変えていく手法、学習する組織の創出方法ですね。「エンパワーメントはツールではない」¹⁴⁾というところで、その先の手法を模索しているところと、ハタから勝手に思っています。

「エンパワーメントという視点でチームを」とは、看護部長をしながら書き上げた博士論文「看護提供チームにおけるエンパワーメントの様相」のことです。

彼女のメモを受け取ったその頃、「ナレッジマネジメント」について情報を集め始め、野中郁次郎の『知識創造の方法論』¹⁵⁾を読んでいた。『看護管理』の特集「看護管理とナレッジマネジメント」への寄稿³⁾を終え、別の号に関連書の書評¹⁶⁾を寄せる準備をしていました。

届けられた文献は、このようなことをよく見ている、まるで私の思考生活を見抜いていたような指摘をする図書館司書をプロフェッショナルと感じました。こうした行いは、いわば、思考の伴走者、私なりに思い切った表現をしますと「思考のストーカー」ともいえると思いました。私の関心がチームの様相から、次の段階として自分の関心事がそのチームを変えていく手法に移っていると意識したのは、正直にいきますと、彼女のメモによってであったと思います。

ところで、届けられた文献は、図書館の新作図書『コミュニティ・オブ・プラクティス』の監訳者による序文¹⁷⁾でした。「実践コミュニティ (Community of Practice)」とは、ウェンガーがレイヴとともに1991年に発表したコンセプトです。彼らは、文化人類学的な企業の観察によって、どのような組織にも必ず「人々がともに学ぶた

めの単位」があることを発見しています。そして、実践コミュニティを「共通の専門スキルや、ある事業へのコミットメントによって非公式に結び付いた人々の集まり」と定義しています。さらに、実践コミュニティでは、「思いをもって人と人をつなげるコーディネーター役の存在が重要であり、自由に社内外を動き回ることができるように経営者は支援しなければならない」とありました。

私もリーダーとして、このコーディネーター役の看護師が組織の中を自由に動き回る、あるいは内部のみならず外部、病院内外を動き回ることができるようにしたいと考えていました。CNS (専門看護師) などが、さしずめ看護実践コミュニティのコーディネーターとみることができます。文献では、自主的に知識を高め合う活動を組織全体に広げるために、実践コミュニティの価値の可視化と評価測定が極めて重要であり、活動を担うコーディネーターの最大の敵は「時間」であるとされていましたが、これは、私の経験に照らしても大いに思い当たることでした。

さらに考えてみますと、このできごと、図書館司書が届けた文献とメモを契機として、私の思考が整理され方向性を定められたことは、まさにこの実践コミュニティの一場面ではないかと感じています。言い換えると、図書館司書は実践コミュニティのコーディネーターとしての機能を持っているのではないかということです。たとえば、大学内で研究班という実践コミュニティの間を渡り歩き、人と人をつなげるようなことです。とすると、学長は、図書館司書は知のコーディネーターとして大学内外を自由に動き回ることができるよう支援しなければならないと考えられます。図書館の周辺には、実践コミュニティといえる小さな集まりがたくさんあると思いますが、図書館司書がそこを渡り歩くということをやっていたらと、とてもおもしろいと思いました。

(2) 教育的な役割

もう一つは図書館の展示についてのエピソードです¹⁸⁾。当時、新入生を迎える時期、勤務していた図書館ではこじんまりとした展示を行っていました。現在も続いているのでしょうか。題して『大学の勉強ってどうやってやるの? 展』です。そのキャプションには以下のようなことが書かれていました。

大学での勉強の仕方、つまりノートのとり方、調べ方、まとめ方、時間管理などを学ぶための推薦本を紹介したいと思います。ぜひ、ご覧になり、自分に合っ

た本を見つけ、それを読んで、大学での勉強の仕方を理解してってください。最初が肝心ですよ!!!

最後にエクスクラメーションマークを3本もつけられていたことが印象に残っています。このような図書とともに、新入生にとっては先輩にあたる学生がとったノートのコピーが展示されていました。

現職の大学では、たとえば1年次の導入科目として「大学基礎セミナー」「アカデミック・リテラシー」があるのですが、必ずしも図書館司書がそれに参加しているとはいえない状況であることが残念です。こうした図書館司書の積極的で教育的な役割はとてもありたいということが、そうした実践がないところに行ってみるとわかります。

2. 図書館の要件

看護師、あるいは看護学生の学習環境における、図書館のあり方について、これまでの経験から、4つの要件があるのではないかと考えています。

(1) アクセスのしやすさ

忙しい看護師・看護学生にとって、まず、行きやすいところに図書館があることが必要だと思います。

(2) 快適に学べる空間

快適に学ぶために私が重視することは、開館時間の長さです。看護基礎教育機関の図書館では、多くの場合5時や6時で終わることが一般的であるようです。現職の大学では7時ですが、ただ、米国の大学などでは24時間開館をしているとききます。社会人学生への対応などを考えますと、いつでも自由に図書館を使えることが必要です。前職で学長であったときは、24時間開館を目標にライフワークのつもりでぼちぼちと周囲を説得、機会をとらえて環境整備を支援し、とうとう実現しました。決め手は、病院と法人一体化したことによって警備体制が確立されたことでした。夜中の図書館が危険ではないようにすることが重要ですが、昼夜を問わず働く看護師、長い実習を終えた看護学生が安心して学ぶために、開館時間の長さは要件の一つといえます。

加えて、学ぶ目的とスタイルに合わせたゾーニングがあります。静謐な空間と、一方で談論風発が可能な空間という、この2つの空間が備えられるとよいと思います。

(3) 図書館司書によるサービスの充実

図書館司書の専門性を発揮してサービスを充実させてほしいと考えます。まず利用者のニーズに応じた文献を選択して提供すること、次に文献のアクセス方法の教授

を積極的にすることです。以前、図書館司書は事務職だという考えの大学の事務部門のトップと言いきらされたことがあります。私は、図書館司書はある意味で専門職であり、所属する組織において、思考の伴走者、知のコーディネーターとしての重要な役割を担っているという認識もっています。

(4) アンドラゴジーを基盤とした支援

最も主張したいのは、アンドラゴジー、成人教育の砦としての図書館であってほしいということです。図書館、あるいは図書館司書という人は、徹底的に成人教育理論を踏まえた対応をしてほしいと考えています。たとえば、大学内で学生に対して教員がアンドラゴジー的な対応をしていなかったとしても、図書館に行くと大人として扱われることを期待します。

3. アンドラゴジーの考え方

ノールズによると、アンドラゴジーは伝統的なペダゴジー、つまり学校で行われているような教育と比較すると、学習者の特性に4つの違いがあるとしています¹⁹⁾。人間は成熟するにつれて次のようになると捉えられています。

(1) 学習者の自己概念

大人になるにつれて、学習者の自己概念は依存的なパーソナリティから自己決定的な人間のものになっていく、自分で決めるということに変わっていきます。図書館は、自分で決める、自己決定したいという利用者に対してどう対応するかが問われるわけです。

こうした学習者に対して、重要なのは「学習の雰囲気」です。これは私がいつも心がけていることです。受容され、尊敬され、支持されていると思える雰囲気を大切にすることです。

ここは人間のことを考えているのか、物のことを考えているのか。ここは人々の感情や福祉に関心を示しているのか、それとも人々を家畜の群れのように思っているのか。成人を依存的なパーソナリティの持ち主と見ているのか、それとも自己決定的な人間として見ているのだろうか。

人は、ある組織に入ると比較的早いうちにこのようなことを感知するといわれています。図書館に一步入って、ここがどういう学習の雰囲気を持っているのかは、さほど長い時間をかけなくてもわかることです。そして、こうした雰囲気をつくり出しているのは、恐らく図

書館司書の振る舞いではないかと思います。

(2) 経験の役割

大人になるにつれて、ますます経験が蓄積されるようになります。たとえ大学の1年生であっても、それまでの経験の蓄積があり、その経験が学習への極めて豊かな資源になっていくという考え方です。図書館を訪れた学生、あるいは教員や一般市民もいるかもしれませんが、その経験が資源になっていると考えて対応することになります。

(3) 学習へのレディネス (準備状態)

大人になるにつれて、学習者の関心は社会的役割の発達課題に向けられていきます。関心が生活に密着している課題になるといことです。学習者、つまり利用者の置かれている立場や背景を知り、その知的欲求に応じたタイミングと内容のものを提供する必要があります。

(4) 学習への方向付け

教科中心的なものから課題達成中心的なものへと変化していきます。大人には時間がなく、知識を得たら即時に応用したいと考えます。この応用の即時性、今ここで必要としている知識を提供することです。実習指導者のなかには、「後で調べてきてください」という返答をする人がいます。今ききたい情報、あるいは教えてほしい知識やスキルがあるのに「後にしてください」ということは、アンドラゴジーの考え方からすると適切ではないといえます。

V. おわりに

エピローグとして、最近、出合った、図書館とそのコミュニティ、人々との関係に感動した2つの作品についてお話ししたいと思います。

一つは『パブリック：図書館の奇跡』という映画²⁰⁾です。このなかで登場する図書館長が「公共図書館はこの国の民主主義の最後の砦だ」と叫ぶ場面があります。前述の「アンドラゴジーの砦」は、ここから想を得たものです。「民主主義の最後の砦だ」の後、「戦場にさせてたまるか」と続きます。

もう一つは『お探し物は図書室まで』という本²¹⁾です。いろいろな悩める課題を持った人々が立ち寄って、この地域の小さな図書室で立ち直っていく物語です。無愛想だけれども聞き上手という司書が、思いもかけないサービスの提供で人生を導いていきます。

皆さんが何気なく行っている日々の仕事は、学ぶ人のコミュニティを守り、ときには悩める人たちに大きな導

きとなり、人生の後押しにつながるがあると考えます。図書館司書として働く皆さんにエールを送り、講演を終えたいと思います。

本稿は、2020年12月19日の日本看護図書館協会創立30周年記念式典での講演内容をもとに加筆・修正したものである。

引用文献

- 1) 井部俊子. キャリアから抽出したエキス: 看護のアジェンダ 第190回. 医学界新聞, 2020;3393. https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2020/PA03393_04, (accessed 2021-12-14).
- 2) 中西睦子, 松澤和正. 異端の看護教育. 医学書院, 2015.
- 3) 井部俊子. 学習する組織の構築と看護管理者の役割. 看護管理, 2002;12(7):505-512. <https://doi.org/10.11477/mf.1686901660>
- 4) 看護系学会等社会保険連合. <https://www.kanhoren.jp/>, (accessed 2021-12-14).
- 5) 私立看護系大学協会. <https://www.jspcun.or.jp/>, (accessed 2021-12-14).
- 6) 西部邁. 妻と僕: 寓話と化する我らの死. 飛鳥新社; 2008. p.230-231.
- 7) 井部俊子. バーチャル・ユーラシア紀行: 看護のアジェンダ 第191回. 医学界新聞, 2020;3397. https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2020/PA03393_04, (accessed 2021-12-14).
- 8) 沢木耕太郎. 達人, かく語りき. 岩波書店; 2020. p.ii. (沢木耕太郎セッションズ「訊いて、聴く」, 1).
- 9) 沢木耕太郎. 陶酔と覚醒. 岩波書店; 2020. p.80-98. (沢木耕太郎セッションズ「訊いて、聴く」, 3).
- 10) 沢木耕太郎. 第一章 朝の光: 発端. 香港・マカオ. 新版. 新潮社, 2020. p.9. (深夜特急, 1; 新潮文庫).
- 11) 沢木耕太郎. 南ヨーロッパ・ロンドン. 新版. 新潮社; 2020. p.217. (深夜特急, 6; 新潮文庫).
- 12) 沢木耕太郎. シルクロード. 新版. 新潮社; 2020. p.116-119. (深夜特急, 4; 新潮文庫).
- 13) 井部俊子. 思考のストーカー. マネジメントの探究. 日本看護協会出版会; 2007. p.457-460. (初出: Nursing Today, 2003;18(11):44.)
- 14) Block, P. The empowerment manager: positive political skill at work. San Francisco: Jossey-Bass.
- 15) 野中郁次郎, 紺野登. 知識創造の方法論: ナレッジワーカーの作法. 東洋経済新報社; 2003.
- 16) 井部俊子. 知識とは, その人の“思い”: 『ナレッジマネジメント 創造的な看護管理のための12章』. 看護管理, 2002;17(9): 791. <https://doi.org/10.11477/mf.1686101028>
- 17) 野村恭彦. 知識社会の新たな組織形態: 監修者序文. Wenger, E., McDermott, R., Snyder, W. M. (著), 櫻井祐子 (訳). コミュニティ・オブ・プラクティス: ナレッジ社会の新たな知識形態の実践. 翔泳社; 2002. p.11-23.
- 18) 井部俊子. ノートをとる: 看護のアジェンダ 第113回. 医学界新聞, 2014;3077. https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2014/PA03077_04, (accessed 2021-12-14).
- 19) Knowles, M. S. (著), 堀薫夫 (訳). 第3章 アンドラゴジーとは何か. 成人教育の現代的実践: ベダゴジーからアンドラゴ

ジーへ, 3版, 鳳書房; 2012. p.33-67.

20) 映画『パブリック：図書館の奇跡』公式サイト. <https://>

longride.jp/public/, (accessed 2021-12-14).

21) 青山美智子. お探し物は図書室まで. ポプラ社; 2020.